



TITLE:

霊長類足根骨の比較(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

岩本, 壮太郎

CITATION:

岩本, 壮太郎. 霊長類足根骨の比較(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1980, 9: 48-48

ISSUE DATE:

1980-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162869>

RIGHT:

霊長類足根骨の比較

岩本壮太郎（近畿大）

直立二足歩行を正常とするヒトでは、下肢にかかる負荷に対応して縦足弓が発達する等、足根骨に著しい変化をもたらしている。とりわけヒトの踵骨距骨は荷重を分散させる重要な役割を果たすものであり、その骨梁・関節等に適応が観察される。今回はその外観・断面・X線像による観察を試みた。

1. 距骨ではサル・ヒト共、左側の発達が優位な傾向が認められたが、踵骨では特定の傾向は認め難い。
2. 距骨・踵骨共、サルはヒトに較べて狭小であり、距骨頸のくびれが顕著であること、踵骨戴距突起の突出が顕著であると共に、反対側（外側）にも突起があること等の特徴が認められ、全体として、荷重に対して安定性に欠ける構造を示す。
3. サル踵骨の後距骨関節面は、ヒトのそれよりも相対的に前方に位置し、かつ、関節面が内側前方へと傾斜している。この結果、距骨頭も内側前方に傾斜し、ヒトでは舟状骨を経由して伝わる負荷の大部分が距骨頭から直接、地面へと伝わる。
4. 断面における骨梁・皮質の構造は、サルでは骨自体が小さいため骨梁があまり明瞭でないが、その走行はヒトと類似している。ただ踵骨では、骨中央部に顕著な髓腔が認められ、この機能的な役割は明らかでない。
5. 以上の結果と、距骨の長軸が、サルではヒトよりも大きい角度で内側方向に向くことを考え併せるならば、サルの足根部における負荷は矢状方向よりも、前頭・垂直方向への分散に特徴付けられるといえる。この特徴がどのような形態変化としてとらえられるかについて今後の課題としたい。

房総半島におけるニホンザルの分布の変遷

岩崎 泰三

（日本野生生物研究センター）

昭和53年度に行った房総半島における分布調査は、現地での聞きとりを主体にし、1975年以降行なわれてきた哺乳類分布調査のアンケート調査を

併用した。このアンケート調査は、これまでの調査の欠点であった調査地域の偏りを是正する目的で、千葉県全域を対象に行ない、房総半島のニホンザルの分布状況について全体観を把みうよう計画された。

アンケート送付数は241通、回答数 140通、うちニホンザルの生息ありと回答したのは34通である。このアンケートの結果から注目すべきは次の2点である。房総半島南端の白浜町に、他のニホンザルの分布域から10km以上離れて群れとヒトリザルが生息するという情報が得られたこと、房総丘陵の東部太平洋岸の夷隅川流域にヒトリザルだけが見られる地域が、かなり広く広がっていること、である。

現地の聞きこみ調査は、このようなアンケートによる知見の確認と、群れの分布域の1972年以降の変化を調べるために行なわれた。その結果、白浜の群れについては確認できなかったが、群れの分布域が、1972年当時に比べると、南方、北方、東方に向けてやや拡大していることがわかった。ただし、高宕山系の最北に位置した鹿野山南面のT-Ia群は、ここ数年間に繰り返して捕獲されたために消滅した可能性がある。少なくとも今年度の調査では確認できなかった。

君津市蔵玉、大滝町小倉野で近年になってニホンザルの群れが見られるようになった。この地域にニホンザルの群れが出現したことによって、従来孤立した生息域と考えられてきた大福山山系は、主たる生息域と連続するようになった。

生息域の全域を面としておおう調査の進展に伴ない、地域個体群の構造を空間的に描くことができると考えている。

暑熱環境下のバタスモンキーの体温の変化

登倉 尋実（奈良女子大）

アフリカのサバンナから半砂漠の荒地にすみ行動は敏捷で長時間走ることができるバタスモンキーは、走るにより体内で発生する熱をどのように処理するのであろうか。暑熱下で浅速呼吸現象や発汗は起るのであろうか。以上のような興味から昨年度に引続き本年度は2頭のバタスモンキーで暑熱寒冷下の直腸温(T_{re})の変化のデータを集めた。得られた結果を要約すると、① T_{re} は